

第1章 新市の概況

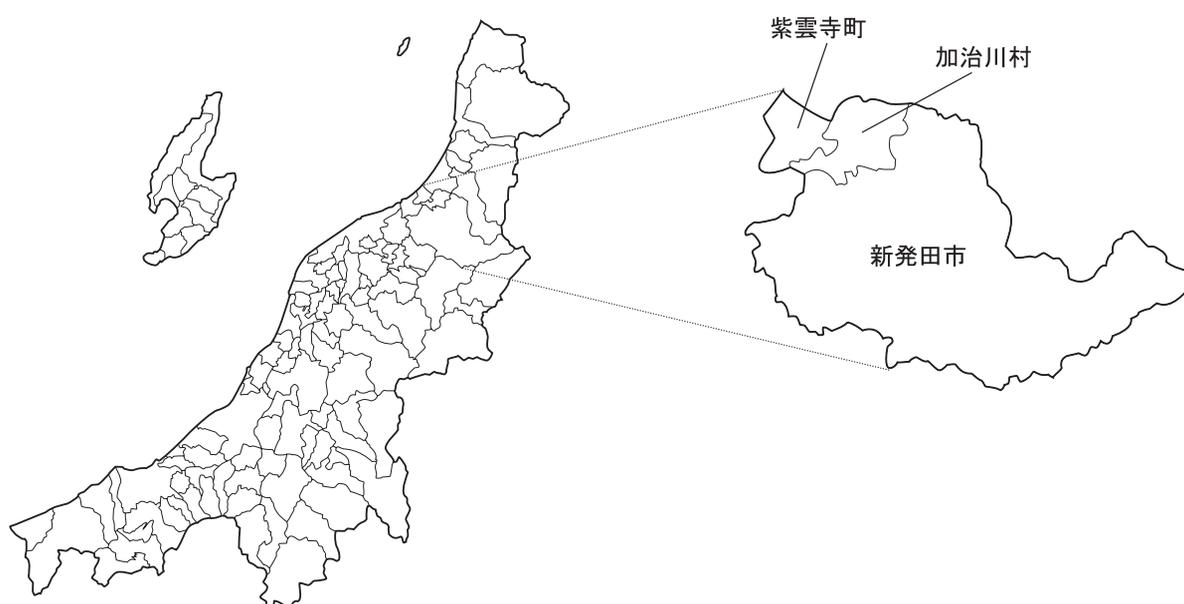
第1章 新市の概況

1 新市の概況

新市は、新潟県北部に位置し、県庁所在地である新潟市から北東に約30kmの距離にある。

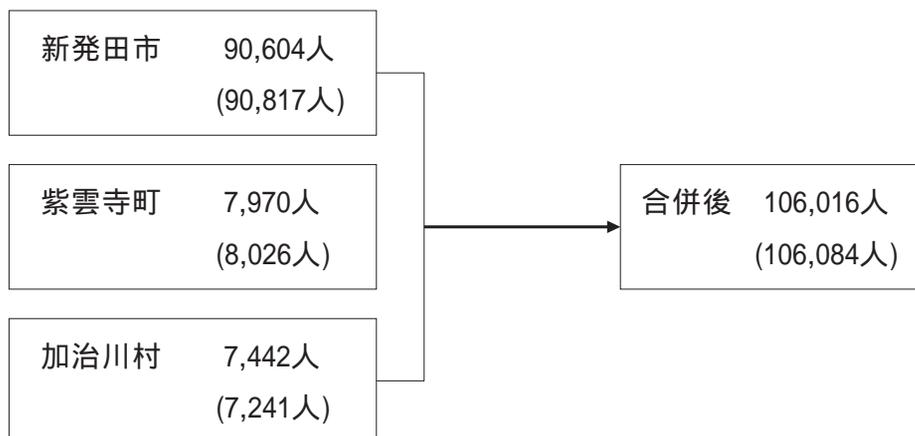
北西側は日本海を臨み海岸が広がっており、また南東側の山岳地帯には磐梯朝日国立公園、胎内二王子県立自然公園がある。加治川を水源とする豊かな水田が開けた県内有数の穀倉地帯であり、山から海までの豊かで多彩な自然環境、産業資源、歴史文化資源に恵まれた環境にある。

気候は、四季の変化がはっきりしており、日本海側の気候特性が顕著で、冬期間は西または北西の季節風が強く、12月から3月まで降雪がある。

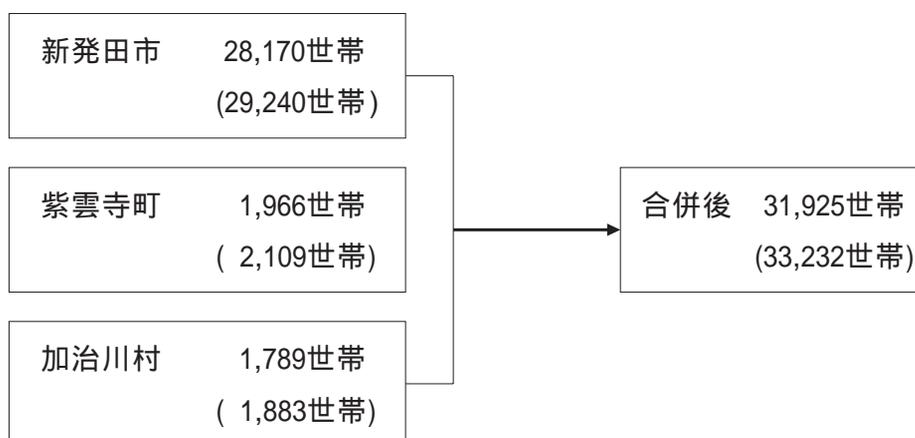


位 置 (東経139度16分～139度37分、北緯37度49分～38度03分)

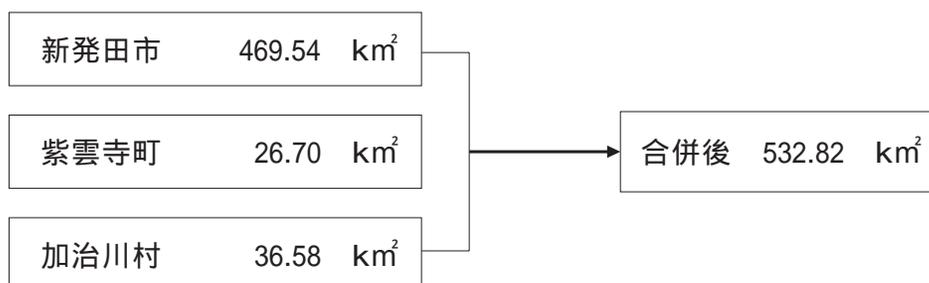
人 口 (上段は平成12年国勢調査、下段は合併時の住民基本台帳人口)



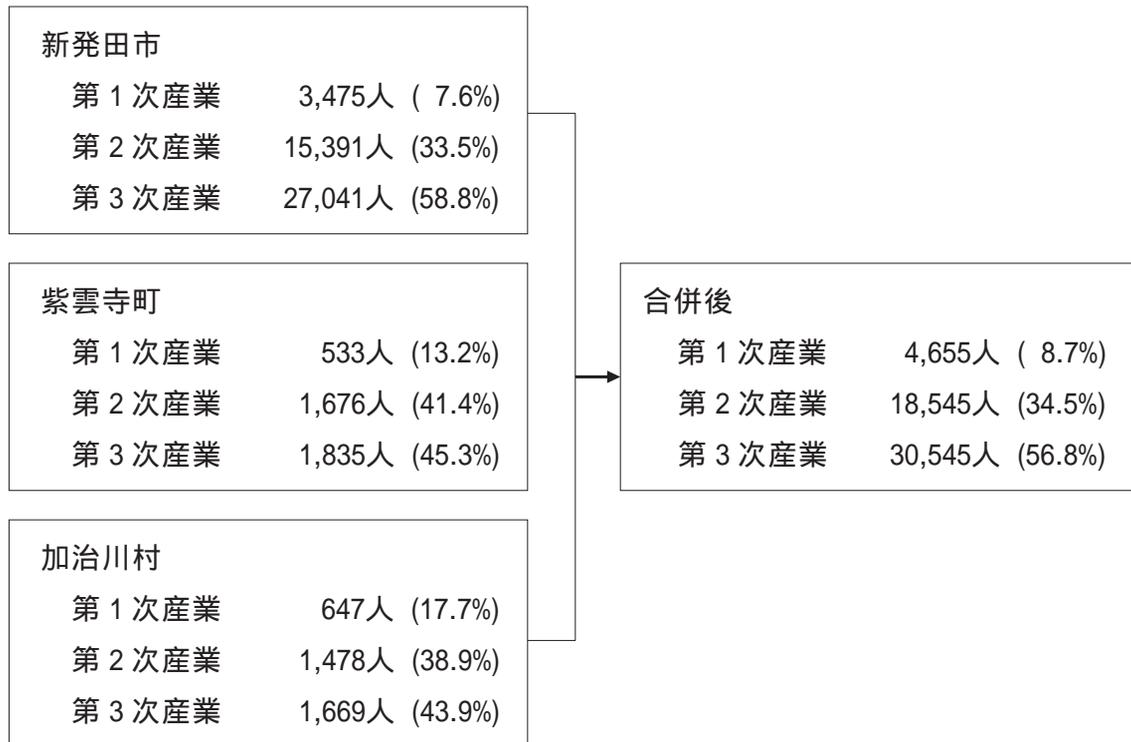
世 帯 数 (上段は平成12年国勢調査、下段は合併時の世帯数)



面 積



産業構造（平成12年国勢調査）



2 三市町村の沿革

(1) 新発田市

平安末期、新発田市の地域は加地荘・豊田荘と呼ばれ、城氏滅亡後は鎌倉幕府の地頭佐々木氏が開発し、以後戦国時代までその子孫が揚北衆の雄として活躍した。

江戸時代に入ると、加賀国大聖寺から入封した溝口氏の新発田藩に引き継がれ、その後、政治、経済、文化の中心として基礎を築き、近隣の人たちの盛んな交流の中で独自の歴史や文化を育み、阿賀北地方の中核都市として繁栄してきた。

明治34年の廃置分合により、現在の行政区域に新発田町、鴻沼村、猿橋村、川東村、菅谷村、加治村、松浦村、五十公野村、米倉村、赤谷村、佐々木村、中浦村、本田村の1町12村が誕生した。昭和15年に鴻沼村を、昭和18年に猿橋村をそれぞれ編入合併し、昭和22年1月の市制施行により「新発田市」が生まれた。昭和30年3月31日に五十公野村、米倉村、赤谷村、菅谷村、川東村を編入合併し、翌昭和31年に加治川村と一部境界変更を行い、さらに、昭和34年4月10日には佐々木村を編入合併した。

そして、平成15年7月7日に豊浦町と合併した。

(2) 紫雲寺町

紫雲寺町は、江戸時代中期に行われた紫雲寺潟（旧塩津潟）の干拓事業により形成された42カ村から村落形成が始まり、干拓事業により新しく形成された農地での農業と、日本海の荒波と闘いながら営々と取り組んできた漁業により発展してきた地域の二つの歴史的背景を有している。

明治22年の市町村制施行により、紫雲寺村、大島村、松塚村が誕生し、明治34年11月1日に紫雲寺村と大島村とが合併し、新しい紫雲寺村が誕生した。

昭和30年3月31日に紫雲寺村と松塚村大字藤塚浜が合併し、町制が施行され紫雲寺町が誕生した。また平成2年に加治川村と一部境界変更を行った。

(3) 加治川村

加治川村は、山手地帯と江戸時代中期の紫雲寺潟干拓により形成された42カ村から集落形成が始まり、干拓事業により開発造成された新田により米作物を基幹とした農村として発展してきた。

明治22年の市町村制施行により、金塚村、加治村、上館村、泉村、中川村の5村が誕生した。明治34年11月1日に加治村、上館村、泉村、中川村が合併し、新しい加治村が誕生し、明治36年11月1日に金塚村と堀切村が合併し、新しい金塚村が誕生した。

さらに昭和30年7月20日に金塚村と加治村が合併し、加治川村が誕生した。同年

10月20日に中条町と、昭和31年には新発田市と、また平成2年には紫雲寺町と一部境界変更を行った。

